

東漸寺の参道は瑞々しい緑に包まれている。
爽やかな風に見える大きな窓の談話室で、
6月8日(日)ねばあらんどの第6回総会は始まった。

理事たち、会員たち、職員も含め16名は
肩書きは様々なれど、想いは同じ方たちばかり。
「学童クラブを運営することで、
子育てを通して学んだことを地域に発信し、
子どもと育つまちづくりに貢献したい」
初心に帰り、
ねばあらんどの趣旨書の言葉を、改めて確認した。

先立つこと1ヶ月前、5月8日には職員総会もあった。
自己紹介のときに、全員が各々の
子どもたちへの想いを語っていたのが印象的だった。
失敗や不安、期待や喜びを、自分の言葉で。
その裏に

「でも、ホントはさ…。」とか「仕事、多過ぎ！」なんていう
愚痴や不満が全く無いわけではないだろう。
そんなの、どこだって有る。有るということは、誰だって知ってる。
だからこそ、そこで
「だから、出来っこないよ！」と諦めるか、
「だから、ダメもとでいいじゃん、出来るだけのことをしてみよう！」と顔を上げるか、
そこで「ねばらん・らしさ」が見えてくる。

そんなふうな最前線で活躍する職員たちと、
クラブに通う子どもたちが、ねばあらんどの主役。

「ことしは職員会も立ち上がり、
徐々に職員たちが自分で考え・主張できる体制に
変わりつつあります。」と
理事長は誇らしげに語った。

子どもたちのために、未来のために、(それは結局大人たちのためでもあるのだが)
今日も百田はあちこちに“空飛ぶ粉”を振りまく、ティンカーベルのように。
「飛んでみて。でも、どこにどう飛ぶかは、自分で考えてね。」とそそのかす。
「完全な答や完璧な体制なんて、あり得ない。だから一緒に考えよう。そのプロセスが大事。」と。

榎本幸子・記 (ねばらん非常勤職員・わくわくひろば担当)